〔書評〕

池田啓悟著 『宮本百合子における女性労働と政治

——一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面——

沼沢和子

著者「あとがき」によれば、本書は立命館大学大学院博士論文「プロレタリア文学運動の組織論と創作法——中條／宮本百合子を中心とした一九三〇年代プロレタリア文学の実践——」をもとに、加筆・修正を加えたものである。論文と本書の表題を見比べてみると「女性労働」という私などには耳新しい言葉をめぐる発見が、加筆の主な動機としてあったのだろうと推察される。プロレタリア文学運動の理論と歴史についてがっちりした勉強がまず要求される分野で百合子論に取り組もうという若い研究者の出現は、「女性として人間として如何に生きるべきか」といった素朴な人生的関心を出発点に、今から五十年程前に百合子文学にとりついた私にとつて、新鮮な驚きと喜びだった。

百合子が湯浅芳子と共にモスクワに向けて出発したのが、芥川龍之介自死の年の十一月末、満三年のソビエト遊学を終えて東京に帰着したのが一九三〇年の十一月八日である。

若くして文壇に登場し、自伝的長篇の第一作『伸子』を書き上げて旅立ったソビエトでの三年は、人類初の社会主義国の制度と人間を観察するために費やされた。(帰国後の一年間に二十数篇のソビエト紹介の評論を書いている。)帰国一カ月後には日本プロレタリア作家同盟に加わり活動を開始した。作家同盟は全日本無産者芸術団体協議会(ナツプ)に加わって活発な創作活動を展開して来たが、一九三一年の満州事変勃発下、プロレタリア文化連盟(コップ)へのナツプ再編はたちまち一九三二年春の大弾圧にさらされ、作家同盟は三四年二月、コップも四月には解散した。百合子が組織的なプロレタリア文学運動に参加できたのは一九三〇年代の中の三年数カ月だったことになる。

本書全体の構成は次の通りである。

序 章

第一章 与えられたプロレタリアート——中條百合子「ズラカ

つた信吉」論――

第二章 〈接点〉の発見――中條百合子「舗道」論――

第三章 運動の中の抑圧――「愛情の問題」をめぐる林房雄と

中條百合子――

第四章 「宮本百合子」の生成――中條／宮本百合子「小祝の

一家」論――

第五章 統御とダイナミズム――宮本百合子「雑沓」「海流」

「道づれ」と社会主義リアリズム――

終章 〈空虚さ〉の行方――宮本百合子「二つの庭」論――

序章では、百合子にとってプロレタリア文学に取り組むということは、自己の生きる道を切り開きたいという欲求と、プロレタリアートという他者の解放との接点を探る試みだったが、両者の統一はあくまで方針が優位におかれる形で進められ、その結果彼女の作品は多くの矛盾を抱えこみ「ときには百合子自身が他者にとっての抑圧者となることもあった」とされている。抑圧者という表現が気になって本書における用例を探すと、第三章の三ページ目に「右翼の偏向に関する論争」は百合子と林房雄が加わることによって「指導部と反指導部、抑圧者と被抑圧者を簡単に腑分けすることのできない混沌とした様相を呈する」とあった。文学運動内に意見の対立がある場合に指導部＝抑圧者と呼ぶのなら、指導部の掲げる方針に忠実な作品を書くこととする百合子自身が「他者」としての抑圧者となることもあった」訳であろう。

第一章は百合子のプロレタリア文学第一作「ズラかった信吉」

〔改造〕一九三一年六月九月号）に当てられている。作家同盟が作家に題材を割り当てる方針で、百合子にはソビエト同盟を求めたのに応じて執筆された。「一九三二年に於けるナツプの方針書」に示された世界観を具体化したような状況説明から始まっている。××林業株式会社の現場人夫募集に応じてシベリアに渡った農家の三男坊の信吉が、同じ現場のロシア人労働者の働き方を通してソビエトに興味をもち、現場から単身抜け出して三等寝台列車でモスクワに向かう。車中で知りあった知識人風の朝鮮人青年の助けで職と住む所を得て、日々の生活の中で社会主義を学んで行く話である。

この小説以降「社会主義への目覚め」というモチーフを繰り返して取り上げることになる百合子にとって「社会主義」とは何であったか。「目覚め」とは今とは違う新しい意識への変革を指している。この新しい意識と制度とのつながりを実現する（場）こそが社会主義と呼ばれているのである、と著者は述べている。論の展開に先立って、あるいは途中で、こうした語義の確認を行うのが本書の魅力の一つである。

モスクワでの信吉は主に観察者である。証人として裁判所に呼び出された過程で、性的交渉における責任の問題として養育費の制度があると知った信吉は、工場の同僚のアクリーナから誘惑された時「養育費払う金もねえもん」と断る。作者としては制度が人の意識に働きかけていることを描こうとしたのだろうが、意識の変革が単純に行かないことをよく知っている百合子自身が、満

足できる出来栄でなかったと日記に記しているという。ともあれ「ソ連紹介をする中で百合子が獲得したのもこそ、こうした社会制度を見るまなざしであった。さらに言えば、そうした制度と人間のかかわりであっただろう」という著者のコメントに全く同感である。

この小説のクライマックスは「食糧配給監督の突撃隊」結成へとつながる討論会である。食糧不足の原因が富農によるサボタージュと運輸や消費組合がうまく機能していないことにある、という報告が「ブラウダ」に掲載される。信吉は区の代議員である知人から、別の工場では消費組合監督の突撃隊を結成したという話を聞き、同僚に伝える。さっそく休憩時間を利用して討議の場もたれる。

コムソモレーツ（青年共産主義同盟員）のヤーシヤが口火を切つて「ブラウダ」に載つた報告を説明し始めると、聴衆の反応は聞き飽きたという冷めたものだったが、「一九二八年の官僚主義撲滅の時のように、階級的自発性で動き出す時が今又われ／＼の前に来ている。」とたたみかけると雰囲気が変わる。労働者に食糧が足りない時に国家保安部と外国人だけが優遇されていることへの疑問をぶつける発言も出る中で、婦人旋盤工のアクリーナが消費組合を批判し、四十がらみの掃除婦マルーシヤがつつましい釣銭トラブルを論じて、消費組合がいつもキツチリ働いているとは限らないと結論する。「政府だってうまく管理してるとは云えねえ」と呻つて男たちが騒ぎ始める中、婦人旋盤工のオーリヤが

立つて、富農とその手先きは、食糧配給を混乱させればソヴェート大衆は不平をもち始め、自分のソヴェート権力に反抗するだろうと、それを待っているのだと熱弁をふるう。

食糧の問題は、信吉の周囲の男たちの間でも「女性的問題」と囲い込まれた形で女性と結びつけられていた。討論の場はこうした区分を突き破り、この問題こそ階級的自発性を発揮すべき緊急の課題だとされる。そしてそう発言したのがオーリヤであり、議論の方向を変えたのはマルーシヤだった。「こうした女性の描き方が比較的柔軟であったのは、当時のプロレタリア文学運動や共産党の指針に女性が明確に位置づけられてはいなかったからではないだろうか。」と本書の著者は逆説的に評価しているが、何よりも作者の百合子自身が、形成期にある新しい社会で生々と発言していた女性達の姿を思い起こし、感興をそそられるところがあったはずである。帰国後の第二作は、日本の首都東京のオフイス街で働く女性達の物語だった。

「舗道」（婦人之友）一九三二年一月―四月）について、本書の著者は「労働者」信吉を描いて完成させることができなかつた百合子が、自らの立場と「労働者」をつなぐものとして発見したのがこの「新中間層」の世界であり、「女事務員」だったのではないか。」として、当時の社会情勢やプロレタリア文学運動を背景に詳細に分析している。丸の内にある大会社で働くタイピストのミサ子を中心に、その同僚で夫が失業中のはる子が墮胎を試みて体調を崩し、勤務中に倒れ解雇されるところから話は始ま

る。会社の人事課が作り出した「気風」によって男の社員からは居ても居なくても問題にしない扱いを受け、孤立的配置によって分断されている女事務員たちが、はる子への見舞金集めでかつてない一体感を強め、互いの結びつきを深めようと演劇サークルを立ち上げるところで、この作品は作者の三二年春の検挙のため未完に終わった。

労働者の中に組合への入口ともなる文化サークルを作ること、三一年秋にナツプからコップへと再編されたプロレタリア文化運動の根幹にかかわる方針だった。百合子は自分が参加した文学サークルで女事務員の世界を知って「舗道」の題材を得、作中に文化サークル立ち上げの動きもとりにこんでいる。「このように、プロレタリア文化運動の方針をいかに実現するか、というのが作家同盟加入以後の百合子の文学的実践の課題であった。」と評した著者は、さらに作中に「全協一般使用人組合」の名が出ているのに注目し、百合子も参考にしたと思われる或る論文で「一般使用人」（俸給生活者）を上中下の三層に分け、下層には小中学校出の事務員と広範な婦人労働者が含まれるとしているのを見出す。百合子が「舗道」で描こうとしたのは「下層部分」に一括されてしまう婦人労働者の中にある様々な差異であり、見えて来たのは「経済的地位」とは異なる「性にもとづく階層化」だった。それは百合子自身で発見したものであり、百合子を取り組もうとした「女性労働」の問題の解決は、もはや方針の忠実な実践だけでもたらされることはないだろう、と第二章を閉じている。

第三章は冒頭に中條百合子「揺れる樹々」(「改造」一九二五年一月)から伸子と恋人佃一郎との会話の場面が引用されている。仕事を続けるには産児制限が必要と考える女性の怖れと後ろめたさ、何でもないことと片づける男性とのすれ違いを描いた場面で、この章の内容を暗示して効果的である。著者は文学運動の中で未解決に終わった諸論争のうち「愛情の問題」論争をとり上げ、林房雄の恋愛観は一個独立の労働婦人の出現を前提としながら「妊娠、出産」という視点が全く欠落し、蔵原惟人は共に闘争している男女が「夫婦の関係」を結ぶことはありうるとしながら、これ又「妊娠、出産」の可能性は全く考慮していないことをつきとめている。私はプロレタリア文学運動も「男社会」だったと今更ながら驚くと共に、若い男性研究者がこういう点に着目したことに、時代の変化と頼もしさを覚えた。

第四章は「小祝の一家」を周到に論じつつ、その夫と妻の関係を百合子の場合と重ね筆名改姓問題に及んでいる。夫を支える妻の女給という職業を女性労働としてどう評価するかは、私にとっては宿題である。

第五章は「雑沓」系列の方法と社会主義リアリズムを重ねた研究蓄積にもよく目配りしてすっきりと論じ、戦後の作品では「雑沓」系列の二つの手法の緊張関係は解消され、評価し価値づける語り手に焦点化されるとし、終章は『二つの庭』論である。百合子がかつての共同生活者と再び向きあった作品で、伸子に焦点化された語りの中で、吉見素子は語り手の欲望を突き破って解釈す

る余地を我々に残している。百合子が殉じようとした社会主義が揺らいだ今、作品の中に読むべきはむしろ数々の矛盾の方である。問題は解決されねばならないとした彼女の思いは否定できない。そのひとつひとつを検討することが百合子の残した作品を読む意味ではないだろうか、と著者は述べて本書全体の結びとしている。

(立命館大学文学部人文学研究叢書4、風間書房、一七〇頁、二〇一五年四月刊、本体価格五五〇〇円)

(ぬまざわ・かずこ 近代文学研究者)